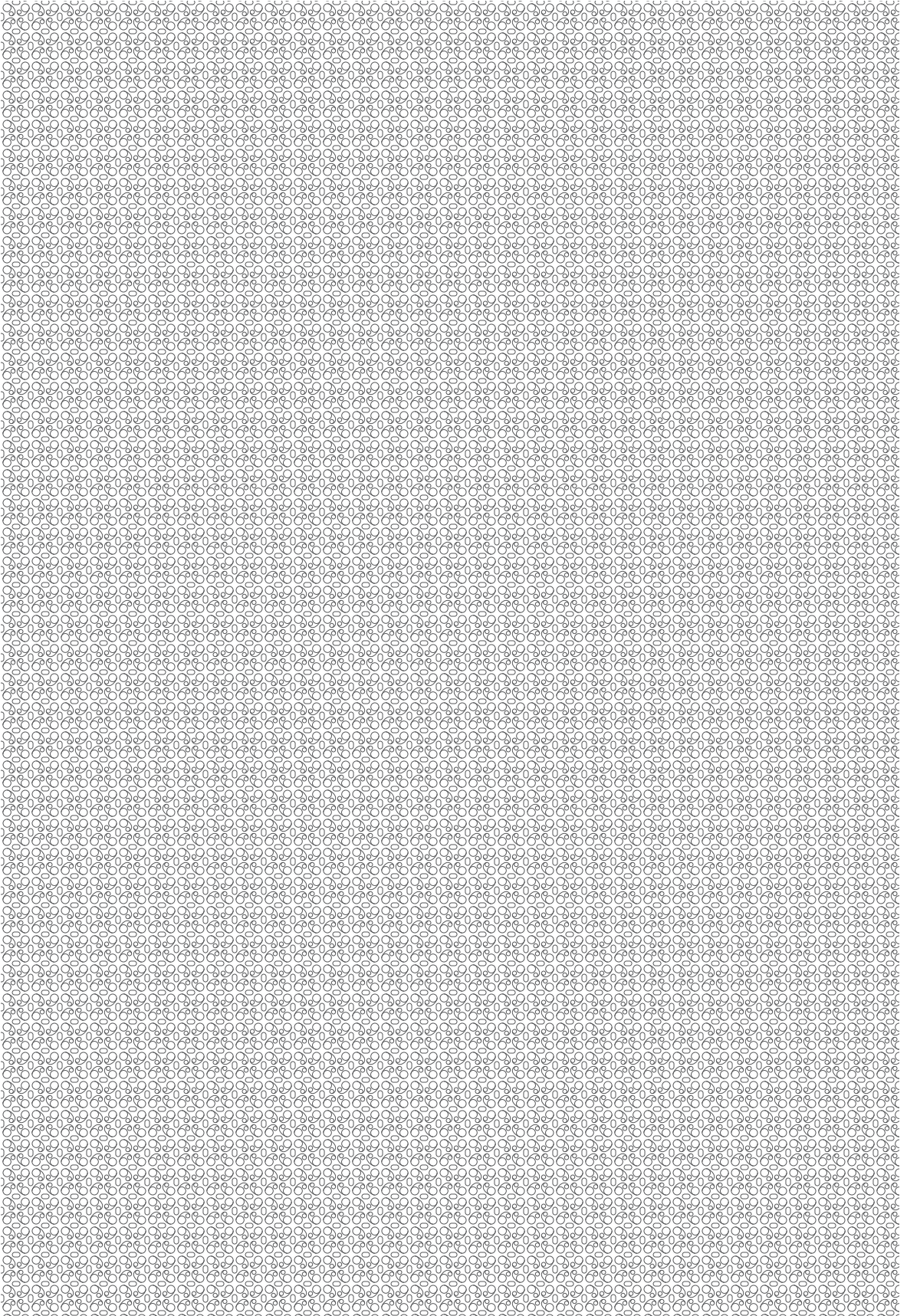


## 2026年度入学試験問題

# 国語

(試験時間 15:00～16:00 60分)

1. 解答用紙は、マーク解答用紙のみです。
2. 解答は、必ず解答欄にマークしてください。解答欄以外にマークすると無効となります。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、一度マークした箇所を修正する場合、しっかりと消してください。消し残りがあると、解答が無効となることがあります。また、消しくずを残さないでください。
4. 解答用紙を折り曲げたり、汚したりしないでください。
5. 解答用紙には、必ず受験番号と氏名を記入・マークしてください。未記入や記入・マークミスなどがあった場合は、当該科目の解答は無効になります。



— 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(45点)

アメリカの著名なジャーナリストであるウォルター・リップマンは、第一次大戦直後の一九二二年『世論』という書物を著わした。今日でもマス・コミュニケーション研究の、古典として知られるこの書物は、次のようなエピソードで始まっている。大洋のなかに一つの島があつて第一次大戦の直前、少数のイギリス人、フランス人それにドイツ人が住んでいた。この島では六十日に一度、イギリスの郵便船が通つて来ることによって、わずかに外界との接触が保たれていた。一九一四年九月この島に住む人々の主たる関心は、新聞に掲載されていたある殺人事件のコウハン<sup>(1)</sup>の結果であつた。まことに平和な生活であつたと言う他はない。しかし予定の船はなかなかやつて来なかつた。そして郵便船がようやくこの島に到着したとき、この島に住む人々は互いに敵国人になつたことを知つて仰天した。海底電線の通じていなかったこの島では、第一次大戦が始まつたことを誰も知らなかつたのである。

リップマンはこのエピソードを手掛りとして「われわれの頭のなかにある映像」と「現実」との間には常にズレが存在している、という事実を述べている。この島の住民の例でいえば彼らの頭のなかにあつた映像は、戦争のない平和な世界であつた。だからこそ彼らの最大の関心事は、殺人事件のコウハンの結果だつたのである。しかしながら現実の世界においては、既に第一次大戦が開始されていた。そしてイギリス人とフランス人は、ドイツの敵国人になつていたのである。このようにわれわれの頭のなかの映像と、現実とのギャップを語るリップマンは、われわれの生活は次のような三角関係によって、成り立っているという。つまり「われわれの頭のなかにある映像」、「その映像に向つて働きかけるわれわれの行為」、それに「現実の世界」、この三つの要素の三角関係によって成り立っているという。

私はこのリップマンの「三角関係」の話を聞くと、パークレーの社会学教授であつたハーバート・ブルーマーのことを思い出す。ブルーマー教授に私が教室で初めて会つたのは一九六五年の冬、私がスタンフォードで修士号を得て、パークレーの社会学部の、博士コースに入学した時だつた。あれはスタンフォードのセミナーのように、夜の七時半から始まる社会学理論の講義で

あった。

ブルーマー教授は、シカゴ大学時代アメリカン・フットボールの著名な選手であった。一九六五年当時教授は、既に定年直前の六十四歳であったけれども往年の名残りを留めて、赤ら顔のガツシリしたキヨカン<sup>(2)</sup>であった。このブルーマー教授は、リップマンと同様の認識論を教室で展開していたものである。たとえばステイール製のいすを軽々と片手で持ち上げて、学生達の前に置く。そしてそのいすにわざとつまずいて見せて、人間が意識しない限りいかなる外界の現実も、彼にとっては存在しないと主張する。人間は自己の意識に上った限りの現実に対して行為する。もしその人間の意識が、現実の世界とズレているならば、人間は外界からの報復を受けたとき初めて、自己の意識の誤った部分を訂正することができる。もしこの報復がトラックと衝突するというような、重大な事件であったならば、彼は自己の意識を修正する機会を、永遠に失うかもしれない。これがブルーマー教授の主張であった。さて私は研究を組織するには、まず特定の現象を選び出し、その現象を引き起こす原因を求めて因果関係を設定しなければならないと言った。しかしもちろん、すべての研究がこのような因果関係に基く仮説を立てるだけで終るのであったなら、それは経験科学とは言えないであろう。仮説を立てた研究者は、次にその仮説を経験的事実に合わせて、テストしなければならぬ。検証と呼ばれるこの過程はいわば「われわれの頭のなかにある像」を、(4)と照らし合わせて、その間に相違がないか否かを調べる過程に似ている。

しかしながら、ここでわれわれは頭のなかの像と現実との差だけでなく、抽象と経験的事実のことを考えに入れなければならぬ。確かに科学における検証とは、リップマンの言う「われわれの頭のなかの像」と、(4)とをつき合わせて、より正確な像をわれわれの頭のなかに描く過程に似ている。しかし科学における「頭のなかの映像」とは、(4)と比較して、より抽象的な、より一般的な、より適用範囲の広い、従って問題解決により役立つ映像なのである。ここで私たちは仮説の問題から一步進んで、<sup>(5)</sup>概念と理論のことを、考えなければならぬ。

概念などという話が難しくなる。しかし概念とはもともと人間の経験が凝縮したものである。われわれは誰でも幼児のときからの経験を<sup>(6)</sup>チェックセキして、その結果、経験のエッセンスを頭のなかに収めている。赤いリングしか食べたことのない幼児は、

黄色いリンゴを見て最初はナシかと疑う。しかし黄色いリンゴがあることを知れば、赤いリンゴも黄色いリンゴも同時に包括する、より一般的なリンゴという概念ができ上るであろう。最近アメリカから来た友人夫婦を家に招いたとき、われわれは日本流の丸い「二十世紀」ナシを食後に出した。ところが彼らは、こういう球形のナシもあるものかと驚いた。実はこちら側も、アメリカ人が球形のナシを知らなかったという事実と接して、驚いたのである。彼らは細長い西洋ナシしか食べたことがなかったのである。私たちの家で「二十世紀」を食べた彼らは、ナシについてより一般的な「概念」を獲得したことであろう。

これに似た例は私の家族も経験している。一九七三年に私たち一家四人はアメリカから日本に帰ってきた。その時、長女は小学校の二年生であった。当然のことながらアメリカで生まれアメリカで育った彼女にとって、日本の風物は一つ一つ変わったものであったらしい。私たちが日本に帰ってきたときは、九月の初めで外では油ゼミが鳴いていた。サンフランシスコの近郊には夏でもゼミがいない。油ゼミのあの大きな鳴き声は、彼女にとってよほど異様だったらしい。日本語をまだ話すことのできなかった彼女は「あのうるさい音は何なの」と英語で私に聞いた。「うるさい音」つまり noise という英語を使ったのを、今でも覚えている。まさか一種の昆虫が、あのような「騒音」を発するとは考えてもいなかったのだろう。そこでたまたまあった昆虫図鑑を見せて、「ゼミ」という昆虫が、日本には存在することを教えた。するとなんと彼女は「ハエみたいな虫なのね」と言うではないか。確かによく見るとその図鑑はゼミの形は示していても大きさを示していなかった。そして上から見たゼミの平面図は確かにハエにそっくりなのである。彼女は生れ故郷のアメリカの家で見た、なじみの深い「ハエ」の概念を使って、「ゼミ」という全く新しい経験的事実を、理解しようとしたのである。

カリフォルニアで育った私の長女は日本に帰ってきた時、「ゼミ」を「ハエ」に似た昆虫だと思った。これは人間の認識の過程をよく示した例である。人間が「頭のなかにある映像」を手掛りに「現実の世界」を理解する過程は、概念を手掛りに経験的世界を理解しようとする、人間の認識の過程と同じである。われわれが普通「事実」と呼ぶものは、実は「概念」によって経験的世界から切り取られた、現実の一部に他ならない。私はここで人間の概念とは関係なしに、ゲンゼン<sup>(8)</sup>たる経験的世界が存在することを否定しようとしているのではない。しかし無限の広がりと複雑さを持つ経験的世界を、われわれの一人一人が全て、

同じように認識することは不可能なことである。われわれの認識は完全な鏡のように、現実の世界を写し出しているのではない。われわれが現実に行っている認識は、われわれの持つ概念に導かれて、絶えず変化する経験的世界の一部を、辛うじてつかまえるという仕事なのである。その意味で「概念」がなければ「事実」もないということが出来るのである。人間の認識の過程は、まことに主体的かつ積極的な過程であると言う他はない。

社会学者のタルコット・パーソンズはこのような働きをする「概念」を、サーチライトにたとえている。暗黒のなかでわれわれはサーチライトの光によって、初めて事物を見ることが出来る。これと同じように「概念」というサーチライトによって、照らされた事物を、われわれは「事実」として認識する。しかし現実にはまだサーチライトによって照らされていない、経験的世界の暗黒の部分が広がっている。この無限の暗黒はまだ「事実」として認識されていない、いわば残りの部分である。その意味でこの暗黒の部分は「残余カテゴリー」と呼ばれる。しかしながら単なるサーチライトと、その光によって照らし出された事物と異なって、「概念」と「経験的世界」との間には不断の相互作用が存在している。「概念」は人間自身の思考によって修正される。それだけでなく概念は経験的世界の、人間への働きかけによっても修正される。それは通路に置いてあったイスにぶつかることによって、われわれの「頭のなかの映像」が修正されると、同じことである。

つまり概念が修正されるということはサーチライトの光が増えたり、角度が変わるといふことに他ならない。すなわちサーチライトの光が変わることによって、今まで見えなかった暗闇が照らし出され、新しい「事実」が認識されるのである。言い換えれば「残余カテゴリー」という暗闇が、新しい「概念」によって照らされて「事実」に変化するのである。そして読者が既に気づいておられるように、この概念の修正、さらには新しい概念の創出こそ、人間の知的創造にとつて、きわめて重要な働きなのである。

さて実際の研究の過程において特定の「概念」は、研究者が「何を観察すべきか」、その一般的定義を与えているといふことができる。しかし一口に定義を与えても、概念の種類によってその定義の与え方には、いろいろな相違があるであろう。たとえば社会の研究で使用される重要な概念の一つに「学歴」がある。「学歴」とは一般には「教育水準」のことであろう。こ

れに加えて「出身校」や「学位」についても、コウリョしなければならぬかもしれない。仮に「学歴」を「教育水準」としてこれを具体的に観察するには、「小学校入学から数えて何年間」という基準を、用いる場合もあるだろう。また「高校卒」「大学卒」と分類する場合もあるだろう。このように実際の分析に役立つような観察を行うには、あらかじめ観察についてのカテゴリーを、具体的に「定義」しておかないと混乱が生じる。

実際の研究においては概念を具体化した「指標」を定めて観察を行う。「概念」が観察すべきものについての一般的な定義であるなら、その「指標」は、具体的な観察という「作業」を行うための具体的な定義である。そのため概念を代表する指標は、「作業定義」と呼ばれる。「作業定義」は概念と、「経験的世界」との仲立ちをするいわば経験的な定義である。そしてこの定義に従って観察され、記述化された経験的世界の一部は、データ、あるいは資料と呼ばれて研究の際の経験的証拠となるのである。もし議論が、抽象度の高い一般的概念の平面だけで行われるとするならば、その議論は経験科学ではなくなってしまう。逆に社会科学の議論が、常に経験的世界の平面にとどまるならば、それは地面をはいまわる悪しき経験主義者のレポートになってしまう。社会科学が経験的事実に基づいた科学であるためには、われわれは経験と抽象との間を、往復しなければならぬのである。

(高根正昭『創造の方法学』による)

〔問一〕 傍線(1)(2)(6)(8)(10)に相当する漢字を含むものを、次の各群のA～Dの中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

- (1) コウハン
- A 試験のハンイ  
B 新事実がハンメイする  
C ショハン事情  
D 通訳をドウハンする
- (2) キョカン
- A その分野にはモンガイカンである  
B そこは県のカンカツがない  
C それは地域の古いカンシユウだ  
D その政策はカンリョウが提案した
- (6) チクセキ
- A 古い校舎をカイチクする  
B 内容をチクイチ確認する  
C 非常食をビチクする  
D 牛などのカチクを育てる
- (8) ゲンゼン
- A 政策のカイゼンを求める  
B 計画はカンゼンに実行された  
C 原因はハンゼンとしないままだ  
D テーブルにハイゼンする
- (10) コウリョ
- A コウシユ交代する  
B 資料をサンコウにする  
C 親コウコウする  
D 不当にコウソクされる

〔問二〕 傍線(3)「人間が意識しない限りいかなる外界の現実も、彼にとっては存在しない」とあるが、その説明としてもっとも  
適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 人間は、概念を手がかりに現実の世界をとらえ、誰もが同じように複雑な経験的世界を認識している。
- B 外界の現実とは、人間の意識とは関係なく成立しており、いかなる認識によっても左右されることはない。
- C 人間は、自分の意識にのぼったものしか現実として見なせず、それ以外は存在していても認識されない。
- D 人間は、重要な外界の変化を無意識にとらえており、それを手がかりに経験的世界を把握している。
- E 人間にとっての事実は、概念の有無にかかわらず、経験的世界にすでに存在しているものである。

〔問三〕 空欄(4)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 自己の意識
- B 原因
- C 仮説
- D 常識
- E 現実の世界

〔問四〕 傍線(5)「概念と理論のことを、考えなければならぬ」とあるが、著者の考える「概念」の説明としてもっとも適当な  
ものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 概念とは、複雑な経験的世界を網羅的に理解するために、人間が使用する認識の枠組みである。
- B 概念とは、人間の経験の中から形成され、現実を理解し意味づけるための認識の枠組みである。
- C 概念とは、人間の経験を媒介せずに、経験的世界の一部を切り取って理解するための枠組みである。
- D 概念とは、経験に先立って存在するもので、主体的かつ積極的に事実を認識するための枠組みである。
- E 概念とは、仮説を立てずに用いるものであり、科学における検証において不可欠な枠組みである。

〔問五〕 傍線(7)「人間の認識の過程」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 人間は、客観的事実に基づいて認識を行っており、主観の影響をできるだけ排除しようとする。
- B 人間は、概念を通じて世界を認識しており、現実の出来事を鏡のように認識することができる。
- C 人間は、あらかじめ与えられた概念を使って、外界の全体像を一貫したかたちで理解しようとする。
- D 人間は、概念を通じて経験的世界の一部をとらえ、それを現実と照らし合わせながら認識を深めていく。
- E 人間は、外界からの刺激に反射的に反応することで、意識や概念を介さずに認識を形成していく。

〔問六〕 傍線(9)「サーチャイトの光が変ることによって、今まで見えなかった暗闇が照らし出され、新しい「事実」が認識される」とあるが、この考え方を示す具体例としてもっとも適当でないものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 赤いリンゴしか食べたことがない幼児が、黄色いリンゴを見ることで、その存在を知ったこと。
- B 大洋のなかの島の住民が、郵便船からの情報を得ることで、互いに敵国人になったと知ったこと。
- C ブルーマー教授が、教室の椅子につまづくことで、そこに物があることに気づいたこと。
- D アメリカ人夫婦が、日本のナシを経験することで、丸いナシもナシだと受け入れたこと。
- E 著者の長女が、セミの出す音を聞くことで、日本には大きな音を出すハエがいると考えたこと。

〔問七〕 次の文ア～オのうち、本文における著者の主張や説明と合致するものにはA、合致しないものにはBの符号で答えなさい。

ア 社会科学における研究では、理論的な抽象概念と観察可能な経験的世界との間を往復しながら、複雑な現実を理解しようとする姿勢が重要とされる。

イ 概念は、普遍的に理解されるものであり、どの文化や社会で使用されたとしても、その内容や認識のあり方に大きな違いは生じにくいとされている。

ウ 人間は無限の広がりや複雑さを持つ経験的世界を、誰もが同じように認識しており、その結果として客観的な理解や共通の認識が形成される。

エ 「サーチライト」にたとえられる概念は、経験的世界の全体像を映し出す手段であり、「残余カテゴリー」は照射されないため認識の対象とならない領域である。

オ 概念は、絶えず変化する経験的世界の一部を認識するための枠組みで、具体的な観察の対象を設定するためには、指標という作業定義が必要になる。

二 次の文章は、ヘンペル、ミンク、ホワイト三者の歴史学に関する考えの違いを述べたものである。これを読んで、後の問に答えなさい。(25点)

「フランス革命以前には、歴史記述は文学のひとつとされるのが普通であった。もっと細かく言うならば、修辭学の一分野とされていたものであり、その〈フイクシヨンの〉性格は誰もが認めていた」。歴史学者ヘイドン・ホワイトが『メタヒストリー』(一九七四年)とそれに関連する諸論文において試みていることの眼目は、十九世紀以降、事実と真理を同一視する科学的実証主義に裏うちされて、事実をあつたがままに記述することを目標としてきた客観的な歴史記述も、つまり文学には許されるフイクシヨンを拒否してきた歴史記述も、本質的には修辭学の問題であることを再確認し、その上で歴史記述のあるべき姿を模索することである。

もちろん『メタヒストリー』は一人の思想家の着眼のみから生まれたものではなく、その着眼を誘導した背景があることは言うまでもない。ホワイト自身は、その重要な契機のひとつをカール・ヘンペルの論文「歴史における一般法則の機能」における問題提起にみているが、そこにあつたのは、「歴史学はいまだ科学とはなっていないけれども、科学の方法と基準とをはっきりと採用することによって、科学となりうるかもしれない」という問題意識であつた。それは、歴史学を自然科学と精神科学のいずれに分類するかという論争の (1) であり、さらに遡れば、歴史学を科学と詩の対立の枠組みの中のどこに位置させるかという問題の (1) でもあるだろう。そこには、歴史学独自の自律性をどこに求めるかという問題がある。

ヘンペルは論文「科学と歴史における説明」の中で、自然科学において個々の事例を説明しようとするときには、二つの型がある指摘する。そのひとつは演繹えんえき法則的説明と呼ばれるもので、この場合には、「法則や理論的な原理は、厳密に普遍的なかたちをとり、特定の条件が揃えば、すべての場合にこれこれの性格の出来事が起こると主張する」。もうひとつは確率的な説明で、これは「特定の条件が揃えば、これこれの性格の出来事がこれこれの統計的確率で生ずるだろう」という考え方に基く。ヘンペルはこの二つの説明法が、不十分な形で使われたり、潜在しているのみということがあるにせよ、歴史的事実の説明のさ

いにも利用されていると考えた。歴史学における説明においては曖昧な方法が、自然科学においてはより顕在化しているという見方である。この説を論理実証主義や分析哲学の立場からいかに精緻に批判し修正しようと、歴史学と科学に共通する方法を科学をモデルにして説明するこの系統の思索からは、歴史学を科学に近づけようとする方向性は

これに対して、科学と共通の方法においてではなく、それとは別のところに歴史学の認識方法の独自性を求めようとする方向が、当然ながら考えられる。ルイス・ミンクとヘイドン・ホワイトとがその代表である。

ヘンペルは説明という行為の本質を、個々の事例を何らかの法則に結びつけること、つまり部分と全体の関連づけにいたるのであるが、ミンクにしても、歴史記述における説明の鍵が個々の歴史的事象を互いに関連づけてゆく方法にあることは認める。歴史学の方法の独自性は、その関連づけのあり方に帰着する。個々の事象をまとめあげる方法は、彼によれば、三通り考えられる。

「まず第一に、それらは同一の一般的概念の例として捉えうる」。ミンク自身はこれをヘンペルの発想と比較して、「この理論的把握は、しばしば、演繹Ⅱ法則的とも呼ばれている」と補足する。「幾つかの事象をまとめて捉える第二の、これとはまったく異なる方法は、それを同一カテゴリーの諸例とみる方法である」。しかしこの二つは歴史記述にとって本質的なものではないとされ、第三の方法に目が向けられる。それは、「幾つかの事象がひとつの具体的な関係体の中の要素として捉えられる方法である」。つまり各事象を具体的な相互関係のコンテキストの中の要素としてみる方法であり、部分としての各事象はこのコンテキストという全体と関連づけられる。そして、理論的把握ともカテゴリー的把握とも性格を異にするこの第三の方法を典型的に現実化してみせるのが、ミンクによれば物語なのである。歴史的認識の中心に物語的方法が提唱されるのである。

もちろん、物語的方法の存在を確認しただけでかたがつくわけではなく、このようにパラダイムを交換したあとでは、その特性がさらに分節化されねばならない。物語のコンテキストを形成する各要素の相互関係は、いかなる性格を持っているのか。物語的方法によって与えられる歴史認識の性格の特性は何であるのか、等々、すぐに幾つもの問題が浮上してくるであろう。要素としての歴史的事象と物語のコンテキストの関係について、ミンクは次のように説明する。

出来事が物語の構成される原材料となるのではない。むしろ出来事とは、物語から抽出されるものなのである。出来事は五秒ですむこともあれば、五ヶ月かかることもあるが、いずれにせよ、それがひとつの出来事なのか、多数の出来事なのかは、出来事の定義によって決まるのではなく、その出来事に適切な記述を与える特定の物語構造によるのである。

歴史記述の中の出来事とは、(3) ということだ。出来事の単純な配列が物語を作るのではなく、物語のコンテキストの中で、つまり物語の継起的展開の中で出来事が改めて分節化されてくるとするこの見方は、構造主義以降に特有のものであるが、生の歴史的事象を物語記述の中の出来事に移しかえるとき、その両者の関係はどうなっているのか。ホワイトの『メタヒストリー』はその問題にも答えようとする。

しかし、話をそちらに進める前に、ミンクの思索にはいまひとつ留意すべき点がある。それは、物語の与える認識の特性についての議論である。自然科学の陳述において最も重要なのがその結論であるのに対して、ミンクによれば、物語的記述の結論はそれだけ抽出しても、あまり意味のないものである。時間の中で始めから終わりに向けて継的に展開する物語記述においては、その展開そのものの中で認識が与えられ、読者の説得が行われる。ここでは、論証は結論に<sup>いた</sup>到達するための単なる過程ではなく、結論と分断できないものである。展開の道筋に支えられた結論こそが重要なのである。ところが、<sup>(4)</sup> そうだとすれば、パラドックスにも近い事態が生じてしまうのではないか。「物語的理解においては時間的継起の思いそのものが消える——それとも、チェシャー猫の笑いのように残ると言うべきか」。ミンクは同じ事態を指して、「ひとつの全体として把握された物語の行為や出来事は、重なり合う記述のネットワークによってつながれており、記述は時制の外にある」とも言い直している。時間の中で展開する各部分をひとつの全体として超時間的に把握することこそ、物語的認識の特性ということになるであろう。

さて、ホワイトは、歴史の現場に継起する出来事を客観的に記述してゆけば、隠れている歴史の真実が浮上してくるといふ類の考えはとらない。彼にとっても、歴史記述における事実とか出来事は所与として歴史家の前にあるものではなく、歴史家によって構成されるものである。「歴史家は素材を構成する。物語の陳述法一般の要請に従って。この要請は修辞学的な性質を有

している」。ミンクが出来事は物語のコンテキストから抽出されるものとして、構造主義的な視点を極端化していたのに比較するならば、ホワイトの特徴は、歴史の現場における事実と歴史記述の素材となる事実の間に修辞学的な変形を力説するところに求められよう。

歴史の現場は言語行為を通して、分析可能な領域として構成されるものである。この構成行為が行われるときに使われる中心的言語行為が、その歴史の現場にデータとしてたち現れることを許される対象の種類を決めると同時に、それらの対象の間に成立しうる関係をも左右する。その歴史の現場に起こる変化を説明するために鍛えあげられてゆく理論は、その現場が知覚の対象として分節化されたおりの言語様式と合致するかぎりにおいてのみ、〈起こったこと〉の説明として力を持ち得るのである。

先行するのは言語なのであって、ホワイトは、部分と部分、部分と全体を何らかのかたちで関係づけるときには、それが歴史の現場を分節化する格子になると主張する。歴史の現場は最初から修辞学的特性に浸潤されているのであり、そのことが歴史の思索のかたちをも、歴史記述と歴史哲学のかたちをも大きく左右すると言う。しかし、歴史の現場から構成されてくる出来事が互に関係づけられて歴史記述として完結するまでには、中間の諸段階がまだ説明されなのままに残っている。ホワイトによれば、構成された出来事は時間的に配列されて年代記クロニクルとなり、ついで初めと中間と終わりをもつひとつの過程に整理されたところで物語に転化する。「幾つかの出来事がモチーフによってコード化されたところで、読者は物語を与えられたことになる」。

しかしながら、歴史記述は「何が起こったか」を説明するだけではなく、「それで結局どうなったか」も説明しなくてはならない。そのための議論は「演繹インダクション」法則的5)なかたちをとることが多い、とホワイトは考える。ミンクが物語的記述と相容れないものとした部分を、彼はとり込む。彼はヘンペルの系統に立つ認識をも歴史記述の必須のレヴェルとして包含するのであるが、ただし、この二つは峻別シムルされる。「歴史の出来事を物語の要素として構成すること」と「ひとつの状況から別の状況へとつな

がってゆく展開の過程を一般的な因果法則に訴えることによって説明する」ことは、別であるとされる。この峻別の有効性のほどは今は問わないにせよ、ここまで来れば、ホワイトのめざしているのが、修辭学的な立場からのミンクとヘンペルの結合であることは、おおよそ察しがつくであろう。

(富山太佳夫『テキストの記号論』による)

注 修辭……言葉を巧みに用いて表現すること。または、その技術。修辭学は、修辭を研究する学問。

カール・ヘンペル……ドイツの哲学者。      ルイス・ミンク……アメリカの歴史哲学者。      ヘイドン・ホワイト……ア

メリカの歴史学者。      構造主義……諸事象の基底にある構造を研究する思想。      チェンシャー猫……『不思議の国のア

リス』に登場し、笑いだけを残して自分の身体を消してしまう猫。

〔問一〕 空欄(1)(2)に入れるのもつとも適当なものを左の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

A 還元      B 矯正      C 曲解      D 肯定      E 持続

F 素描      G 払拭      H 変奏

〔問二〕 空欄(3)に入れるのもつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 歴史的事実の物語的再現というより、実証的に抽出した事象を組み合わせたものである
- B 歴史的事象が、あたかも物語的なフィクションであるかのごとくに装われたものである
- C いわゆる歴史的事象の透明な模写再現ではなく、物語記述の中で構成されたものである
- D 物語の構成をモデルにして、歴史的事実の中に因果法則を提示しようとするものである
- E さしあたり歴史的事象を客観的に再現することで、物語記述の基礎を形作るものである

〔問三〕 傍線(4)「そうだとすれば、パラドックスにも近い事態が生じてしまう」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 歴史記述の過程では、結論に向けて読者に説得が行われるにもかかわらず、その展開の道筋と結論の間に分断が生まれてしまうこと。

B 物語から与えられる認識においては、継起的に展開した歴史記述が、しかし全体としては超時間的に把握されねばならなくなること。

C 物語記述では、その中の出来事が超時間的なものであったとしても、それが継的に配列されると時間的なものになるということ。

D 物語を理解するにあたっては、本来結論へと到達するための過程に過ぎないはずの論証が、結論より重要なものになってしまうこと。

E 歴史記述全体の超時間性の理解のためには、行為や出来事の記述に対し、むしろ逆に時間的な認識が与えられねばならなくなること。

〔問四〕 傍線(5)「ミンクが物語記述と相容れないものとした部分」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 事実や出来事は所与としてあるのではなく、具体的な関係体の中の要素となることで存在するという考え方。

B 幾つかの要素を同一カテゴリーの諸例として捉える方法は、歴史記述にとって本質的ではないとする考え方。

C 相互に関係づけられた幾つかの出来事がモチーフによってコード化されると、物語に転化するという考え方。

D 歴史記述では、何より言語行為が先行して機能し、それが歴史の現場を分節化する格子となるという考え方。

E 歴史的認識において、特定の前提条件が揃えば、その下ではつねに一定の帰結が導出され得るとする考え方。

〔問五〕 次の文ア～エのうち、本文の趣旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア ヘンペルによれば、歴史記述における説明において個々の歴史的事象を互いに関連づけてゆく方法は、本質的には自然科学の方法と同じものであるとされる。

イ 個々の歴史的事象を同一の一般的概念の例として捉えることが、歴史記述のコンテキストでつながれた事象の全体的把握を可能にするとミンクは考えている。

ウ 歴史記述の構成は、歴史の現場とそれを知覚対象として分節化するおりの言語様式が合致して初めて、説明としての力を持ち得るとホワイトは主張している。

エ ホワイトは、歴史の現場に継起する出来事を客観的に記述してゆけば、「何が起こったか」だけではなく、「それで結局どうなったか」をも説明できるとする。

三 次の文章は『曾我物語』の一節である。一万と箱王兄弟の父である河津三郎祐通は、狩りの帰りに射殺される。兄弟は母の再婚相手である曾我祐信（曾我殿）の元で育つうち、父の敵が工藤祐経であることを知る。これを読んで、後の間に答えなさい。

(30点)

「年ばへには恐ろしきことかな」と人々思ひけるあひだ、ある人、一万が乳母めのとにこの由を語りければ、大きに驚きつつ、母にこの由申しければ、母も大きに仰天しつつ、二人の子どもを呼び寄せ、泣く泣く語られけるは、「誠か、己らはさも恐ろしき世の中に謀叛むほんを起こさんと議し合ふなる。あな、恐ろしや。こは、いかにせん。<sup>(2)</sup>もし人の耳にも入りなば、よかるべきか。汝らよくよく聞け。己らが祖父伊東入道殿は、当鎌倉殿の若君千鶴御前とて三歳になりたまひしを、松川が淵ふちに沈めたてまつりし故に御敵となつて、先年、伊東の館において失はれたまひぬ。己ら、かかる謀反人の孫なれば、敵の左衛門尉さゑもんじょう、上の御敵に申し(3)なして失はるべし。その時、千度悔い百度悲しむとも叶ふべきか。その上、汝らが鎌倉へ召されし時も、曾我殿嘆き申して留めたり。その故は、鎌倉殿、石橋山の合戦にうち負けて、杉山へ入らせたまふ時、梶原平三景時かげときと曾我殿と二人心を合はせて助けたてまつりし故に、駿河国八郡の大介おほすけになされし、その御恩をば皆進まゐらせ上げつつ、『二人の幼き子どもを助けて賜はらん』と申しければ、鎌倉殿憐れませたまひて、『それほどの志ならば、二人の子どもをば祐信に預くるぞ』と仰せ下される故にこそ、汝らは安穩(4)にて今まで希有けうの命をばたもちたれ。それにつけても、曾我殿の芳恩をば生々世々にも報じ尽くすべきか。<sup>(5)</sup>恩を知ることは、鳥類・畜類までもそのいはれありとこそ聞け。<sup>(7)</sup>汝ら人倫においてをや。かかる大恩をば、いかでか報ぜざるべきや。しかるを、かへつて曾我殿に嘆きを与へんとすること、かへすがへすも口惜(8)しかるべし。その恩を報ぜんと思はば、速やかに謀叛の思ひを留むべし。就中、鎌倉殿の御耳に達するものならば、しばらくも安穩にてあるべきか。命があつてこそ謀叛をも起こすべけれ。必ずその心、あるべからず」と口説くどきたてて戒められければ、二人の子ども、目と目を見合はせて顔うち赤らめて立ちにけり。それより後は、人の聞かぬ所にては内々談議しけれども、人目にあらはれて語り合はすることもなし。

（『曾我物語』による）

注 伊東入道殿……伊東祐親すけちか。祐通の父。 鎌倉殿……源頼朝よりとも。 左衛門尉……工藤祐経。

〔問一〕傍線(1)「恐ろしきこと」とは何か。もつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 鎌倉殿の暗殺を計画していること。
- B 母と養父の仲を裂こうとしていること。
- C 兄弟で出家しようと相談していること。
- D 父の敵討ちをしようと考えていること。
- E 曾我殿の失脚をねらっていること。

〔問二〕傍線(2)「もし人の耳にも入りなば、よかるべきか」の現代語訳としてもつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A もし他人の耳に入ったならば、よいことであるだろうか。
- B もし他人の耳に入ったときは、よい機会になるだろうか。
- C もし他人の耳に入りたいならば、よい方法があるだろうか。
- D もし他人の耳に入れなければ、よい結果になるのだろうか。
- E もし他人の耳に入れられれば、よいことがあるかもしれない。

〔問三〕 傍線(3)(4)(8)の解釈としてもっとも適当なものを左の各群の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

(3) 「申しなして」

- |               |        |        |       |
|---------------|--------|--------|-------|
| ┌───────────┐ |        |        |       |
| D             | C      | B      | A     |
| 申し付けられて       | 仕立てあげて | 取りなしても | 告げ口して |

(4) 「希有の命」

- |                |                |                |                |
|----------------|----------------|----------------|----------------|
| ┌───────────┐  |                |                |                |
| D              | C              | B              | A              |
| 世の中にたった一つしかない命 | 鎌倉殿の気まぐれで助かった命 | もう少して失うところだった命 | 八幡大菩薩のご加護を受けた命 |

(8) 「口惜しかるべし」

- |               |              |              |              |
|---------------|--------------|--------------|--------------|
| ┌───────────┐ |              |              |              |
| D             | C            | B            | A            |
| 本当に残念なことでしょう  | 恐らくひどいことでしょう | きつと悔しいことでしょう | まるで愚かなことでしょう |

〔問四〕 傍線(5)「曾我殿の芳恩」の説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 夫を亡くし一人で子どもを育てる母を助けるため再婚してくれたこと。
- B 石橋山の合戦に負け平家側に捕らえられそうになった鎌倉殿を助けたこと。
- C 鎌倉殿に恩賞をすべて返上してでも二人の子の命を救おうとしたこと。
- D 謀反人の孫である二人が安穩に暮らせるように色々手配してくれたこと。
- E 二人の祖父である伊東入道が殺されそうになったとき助命してくれたこと。

〔問五〕 傍線(6)「恩を知ることとは、鳥類・畜類までもそのいはれありとこそ聞け」の解釈としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 恩を受けた理由を知りたいと思うのは、鳥や獣にもあることだと聞いている。
- B 鳥や獣に生まれ変わるのには、受けた恩にどう報いたかによると言われている。
- C 受けた恩に報いようとするのは、鳥や獣にとっては当然のことだと聞いている。
- D 受けた恩に報いようと思わないのは、鳥や獣にも劣る存在であると言われている。
- E 受けた恩のありがたさを感じるのには、鳥や獣にも例のあることだと聞いている。

〔問六〕 空欄(7)に入る語句としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A あたかも
- B いはんや
- C すべからく
- D たとひ
- E まして

〔問七〕 次の文ア～エのうち、本文の趣旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

- ア 「恐ろしきこと」を考える兄弟に、母は反対しながらも一定の理解を示している。
- イ 母にとっては二人の亡父より曾我殿の方が大切だということに、兄弟は気づいた。
- ウ 祖父が鎌倉殿の若君である千鶴御前を殺害したために、二人の父は命を奪われた。
- エ 自分たちを戒める母の言葉を聞いた後は、兄弟は人前で相談することをやめた。

